

チェルノブイリに思いをよせて

ポレーシエ



＜リサイクルショップ・チェルノブイリ＞

「救援」と「現地の事実を伝え続けること」を大切な二つの柱として、医薬品・保養のための支援、里親制度・奨学生制度、コンサート・講演会・写真展等の活動をやっていますが、これぞ「三重の救援募金」ならではの、おばさんパワーで運営する「リサイクルショップ・チェルノブイリ」は、来年2月で10周年。おかげさまで順調、この店の売り上げは救援のための募金となり、三重の活動にはなくてはならない存在です。

現地への毎年の訪問は、私達にはとても難しいのですが、「救援・中部」から情報を提供していただいたり、交換し合って、それぞれの活動形態の違いをプラスに生かせるように、もっと近く、仲良くおつき合いをしたいですね。

— チェルノブイリの子ども達が、笑顔で希望をもって生きられますように —

〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町137 1-10
チェルノブイリ救援・中部 代表：大谷早苗

郵便振替：00880-7-108610

TEL/FAX：052-836-1073（月・水・金 10:00～17:00）

E-mail：chqchubu@muc.biglobe.ne.jp

ホームページ：http://www.chernobyl-chubu-jp.org（アドレスが変わりました。）

来年も楽しみ！「チェルQデー」開催

去る6月15日、勤労会館において「チェルQデー」（総会 & ウクライナ講座）が行われました。

総会とその後のフリートークのなかで、「救援・中部」の活動についていろいろな意見・要望がでました。その主なものを紹介します。



Q チェル救は管理費が支出総額の17%に抑えられ、現地に対する直接支援の割合が高い。

これは評価すべきである。どのような工夫をしているのか？

A 発足当初から、可能な限り現地の救援事業に回そうという姿勢で活動している。有給職員についても実態はボランティアに近い。

Q 昨年度は招聘事業が計画されながら実行されず、今年度は計画さえされていない。招聘事業は活動をアピールする有力な手段であるのに、これはどうしてなのか？

A 昨年は、「チェルノブイリの祈り」の著者、アレクシエービッチさんを招こうと考えたが、彼女のスケジュールが超過密で断念した。改めて、実現に努力したい。

Q 中古医療機器を提供する活動を広げていくと、国内でも梱包や輸送の機会が増えることになる。そのための人件費も考えておいたほうがよいのではないか？

A 予算の補正をする時に考慮したい。（なお、この件に関しては、後日の運営委員会で、「作業日程を早めに決めて、ボランティア情報誌などでボランティアを募る」ことを確認した。）

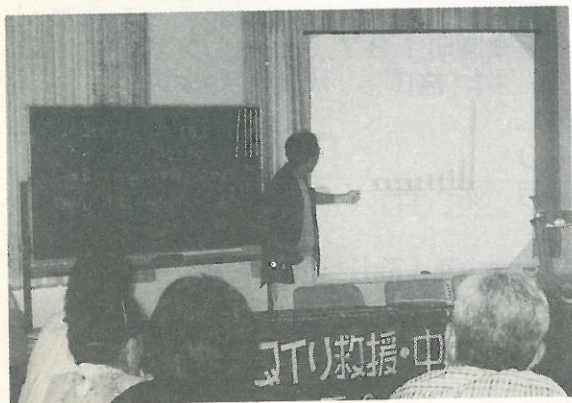
Q 会費について。本会は正会員から会費をとっていないが、会費を取るほうが収入増になるのではないか。また、団体会員の場合、会費を請求されたほうが払いやすい。

A 本会は発足以来、会費制はとらず、不特定多数の人から寄付を集めるというやり方をしている。法人化したおりに正会員の会費制を検討したが、会費の徴収に多大の労力を費やすことになる懸念があったので、採用しなかった。（なお、この件に関しては、後日の運営委員会で、「維持会員制度があるので、寄付よりも会費のほうが都合のよい個人・団体に対しては維持会員になっていただくことを勧める」ことになった。）

(田中)

総会後に行ったウクライナ講座（2部）の一つ目は、事務局の山盛さんによる「移住基金・ジトミル消防署・障害者協会の面々紹介」。普段はシビアなやりとりで終始するカウンターパート達の意外(?)な一面を知ることができ、彼らがずっと身近な存在になりました。

二つ目は、事務局長の河田昌東さんによる「汚染データから見るウクライナの最新情報」。



この講座のもとになったデータは、今年の2月に訪問団が持ち帰ってきたもので、被曝データとしては非常に価値のあるもの。このような重要データを入手できたということからも、現地の「救援・中部」に対する信頼は絶大なものだということが伺えます。

分析の結果わかったことは、「食物連鎖による体内被曝を防ぐことが何よりも重要な課題だ」ということ。「救援・中部」の役割は、ますます重要になりそうです。

(かよ)

今年度の運営委員を紹介します！



大谷早苗 (チエルQ代表)
静かにほほ笑むだけで、絶大な存在感。どこにでもいるような日本の母。

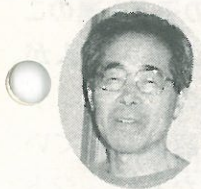


河田昌東 (事務局長)
原発は許せない。遺伝子組み換えは許せない。人類を愛するロマンチックな科学者。

山盛三千枝 (事務局専従)
心も広いが顔も広い。渉外担当。更年期で悩む“踊る”友好使節団長。



佐保克彦 (事務局専従)
拜金主義と無縁の会計担当。若くして悟りを開いた虚無僧。



田中良明
NPO法人化・奨学金制度設立の立役者。市役所職員も一目置く社会派教授。



戸村京子
ウクライナ講座生みの親。永遠の女学生。(なんと、ただ今現役・試験中！)

中島しぐれ
ハーブ展・カード展…。誰もが認めるバザーの達人。



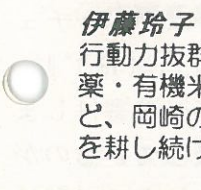
神野英樹
硬派を自認する「ポレーシェ」編集長。ポラ貯担当取締役を兼務。



小牧 崇
伊那の大自然の中で「自然との共生」を説く知的高校教師。



橋本京子
涙もろくあたたかい。子ども心を持ち続ける吟遊詩人。



伊藤玲子
行動力抜群。今日も無農薬・有機米・産地直送など、岡崎の田畑と人々の心を耕し続ける地球人。



竹内高明 (ウクライナ駐在員)
ご存知竹内君。冷静沈着な哲学者。ウクライナ人に最も近い日本人。



原 富男
ある時は運び屋さん。またある時は修理屋さん。便利屋稼業に扮した正体は…知る人ぞ知る「自然エネルギー博士」。



神野美知江
パソコンを駆使し、事務処理をスイスイこなすチエルQの秘書。専門家(看護師)としても活躍。現地訪問の最多記録更新中！

市原佳代
何ととっても若い(注:チエルQ女性陣の中では)。鋭い突っ込みで、男性陣を翻弄。外務省他、担当無数。



北野達也
医療機器メンテの必殺仕事人。ウクライナの看護婦達のあこがれのままと。



「チェルノブイリの1グリヴナ」 キャンペーン

「チェルノブイリの人質基金」代表

キリチャンスキー・サン

このキャンペーンを行おうというアイデアは、2002年2月の「救援・中部」代表団訪問の後、生まれました。この代表団は、私たちへのプレゼントとして、**静岡県**の**星美学園の生徒たちの大きな写真**(右)を持ってきてくれたのです。私たちにとって、それはとても貴重なプレゼントでした。というのも、この学校の子供たちが、数百円の給食費の一部を節約し、ウクライナの乳児に粉ミルクを買うための寄付をしてくれているからです。



ここで、きわめてもっともな疑問が生まれます。**日本の子ども達がウクライナの子ども達のことを思いやることができるのに、私たち自身はどうしてそれができないのか？ なぜ私たち一人一人が、象徴的に1グリヴナ(約25円)をカンパすることができないのか？** もちろん、現在のウクライナの経済事情は非常に厳しいものです。——「国民の55%は貧困状態にある」と認められているのです。しかし、豊かな人たち、国会議員もいますし、ベンツやトヨタ(ちなみに、ジト一ミルでも日本車はけっこう多いのですが、それらは高価なものです)を乗り回している人たちもいます。給料を遅配なしに定期的に受け取っている国民が1,000万人はいます。

「チェルノブイリの人質基金」の依頼によって、州と州内各地区の新聞が、私たちの呼びかけのメッセージを掲載しました。5月27日、州議会は私たちの呼びかけを支持し、最高会議、各州・各市・各地区のすべての議員、企業・施設の幹部、実業家、一般庶民に、私たちのキャンペーンを支持するよう要請しました。呼びかけ文は全国紙『ウクライナの声』にも掲載され、「チェルノブイリの1グリヴナ」のTV放映用アピール・クリップが作られました。私は、ラジオで州内の人々に呼びかけました。人々の無気力を克服して、キャンペーンは支持され始めました。**最初に反応したのは、ほぼすべての新聞の記者たちでした。**幅広くキャンペーンを展開したのは、**州消防局の職員たち**。個人的にはレオニード・アントニューク氏とボリス・チュマク氏でした。日本から最も大きな支援を受けている**州立小児病院のスタッフ**は、1,148グリヴナを集め、基金に寄付してくれました。州消防局とその下部組織は、1,446グリヴナを寄付しました。**私営企業「アウレリヤ」**(訳注:直訳すれば「ミズクラゲ」ですが、何を扱っているのかは不明)は800グリヴナを寄付しました。カンパをしてくれるのは主に豊かではなく、1グリヴナといえどもおろそかにはできない人たちです。**なんととっても、この金額でパン1個、ミルク1杯を買うことができるのですから。**これまでに、基金の口座に5,000グリヴナを多少上回る金額を集めることができました。人々を動かすのは難しいことです。お願いする役を務めなければなりません。しばしば、無理解やうさんくさそうに見る視線に出会います。しかし、「**チェルノブイリの人質基金**」は**キャンペーンを続ける決意を固めています**。もし魚が食べたいのなら、魚は自分たちで釣り上げなければなりません。しかし、この発想を人々の意識に植え付けるまでに、なんと遠い道のりが残されていることでしょうか！

日本でも、「チェルノブイリの25円」というキャンペーンを行ってみてはどうでしょう？

日本の人たちの方が、ウクライナの人々よりも善良であることを私は確信しています。私個人にとって、それを認めるのはつらいことではありますが……。

運営委員会・伊那合宿 …伊那の夜は、またまた怪しく更けて…

「救援・中部」運営委員会の合宿が、7月13日～14日、伊那で行われました。合宿のメリットは、一つのテーマにたっぷり時間をかけ、普段の運営委員会では時間が足りず、なかなかじっくり話せない問題や、「これからの救援活動」といったテーマも話し合うことができるということです。一昨年・昨年に引き続き、今回も非常に好評だったので、これからの定番となりそうです。2日間の討議の結果、次のような方針がまとまりました。

- ①まず、懸案の「1000万円プロジェクト」は、額が大きすぎて、現地で自立的に使うピッタリのアイデアがないということが分かったため、1000万円を300万円と700万円に分け、300万円に関しては、再度現地と打ち合わせて、「たとえば、すべての移住村の診療所をゼレムリヤ村の診療所のように充実させる」等、まとまった事業に使うということになりました。残る700万円は、今後約3年間の海外事業費の不足分の補填に使うこととしました。これは、一般の寄付やボラ貯交付金等が徐々に減少しているため、前年並みの支援を維持し、今後も末永く持続的に活動を続けることを選択した結果です。
- ②医療支援については、新品の高額医療機器の提供はやめ、「中古品を提供し、支援の内容は低下させない」メンテナンス事業に力を入れ、「生命維持装置」の機器を優先的に確保し、送ることにしました。現在、北野さんが主にメンテを行っていますが、北野さんに負担がかかりすぎないように、他の医療工学技師を紹介してもらい、活動の輪を広げていくことも確認しました。
- ③経費節減は、粉ミルク・医薬品医療費・現地事務経費などでも実施せざるを得ません。資金の減少を補うため、新規に外務省の草の根支援資金（日本NGO支援無償資金協力）も申請することとしました。（ようやく、ウクライナも支援対象国に認定されたのです。）※「草の根支援資金」に必要な自己資金の割合などを調べた上で、申請可能な事業（例：ナロジチ復興計画ーインフラ、汚染調査など）を検討します。
- ④招聘事業に再チャレンジします。（「チェルノブイリの祈り」を書いたアレクシェービッチさんを日本に招き講演をしてもらおう。）単独では実施不可能なので、他のグループにも呼びかけたいと思います。
- ⑤その他、運営委員それぞれの役割分担を話し合い、今回の合宿テーマをすべて消化しました。

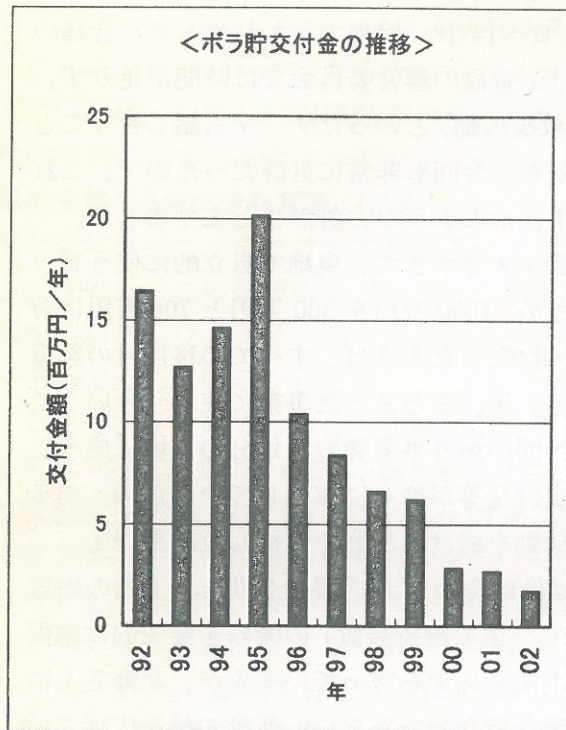
今年のお宿は、昨年の代表団訪問にも参加された倉田さんのロッジでした。ここは、アントニウクさん達が来日したときにも宿泊した、チェルQ御用達の場所です。バリアフリーのウッディーな建物、食材はすべて自家製または無農薬・無添加、牛乳は搾りたて、お風呂は総檜！そして新鮮な空気とともに飲む酒はうまい！！「伊那に来てよかった～」と思わせてくれるおもてなしでした。



〈ロッジ“吹上”にて〉

(かよ)

＜2002年度 ボラ貯交付金の配分額が決定しました!!＞



今年度の配分額は…1,694 千円

左のグラフは、チェルQが受けた交付金額の推移を示しています。'92年に初めて交付を受けてから、連続11回獲得という“快挙”ですが、超低金利のあおりを受けて、額はついに初回の10分の1程度と過去最低になってしまいました。

そんなわけで、10倍大切に活用したいと思います。(J)



続々と寄せられる

中古医療機器情報

「中古医療機器をウクライナへ送ろう!」という活動が、中日新聞に紹介され、賛同していただいた医療機関の方々から、医療機器寄贈の申し出が相次いでいます。先日も、申し出のあった医療機関を訪問して、「機器の写真・機器名・型番の調査等」を行ないました。情報が入るたび、医療機器の状態を調べ、ウクライナへそれを知らせ、受け入れを希望する医療機関の申し出を待ちます。そして、要望と一致することがわかったら、現地へ送る作業（引き取り・荷造り・一時保管）を始めます。今までに、自動蘇生装置・ポータブル心電計（大府市：宮田歯科）、内視鏡（長久手町：愛知医大病院）等を預かり、次回の発送に向け保管中となっていますが、残念ながら、CTスキャン・ベッド100台・針治療機などは現地の要望と一致せず、見送らせていただきました。

手間と時間のかかる方法ですが、不必要な医療機器を送ることは、単に日本からウクライナに廃棄物を送ることになってしまいます。私たちは、医療機器の廃棄処分業者になってはいけません。

ウクライナでは、最新の医療機器が不足していたり、従来の機器が故障しても、工夫をして医療は続けられています。しかし、緊急医療に必要な機器などは高価で、今後も新規購入は考えられません。現地が本当に必要としているものは、何としても送ってあげたいと思います。例えば、一つの命を救うために「人工呼吸器」を、早期発見のために「超音波診断装置」をメンテナンスして送りたいのです。ぜひ、皆様のご協力をお願いいたします。(美)

本連載でもたびたび取り上げた、「中部電力浜岡 1号と2号の廃炉」を求めて、静岡県を中心とする全国の市民 1500名を越える原告による裁判が始まった。

ますます現実味を帯びてくる東海地震が起こる前に原発を止めなければ、大地震の被害は放射能による被害を上乗せして、中部地方一帯が廃墟となるかもしれない。

昨年来、深刻な事故で止まっている浜岡原発を廃炉にするなら、今がチャンスである。

老朽化と電力会社の管理能力の欠如

昨年以來、浜岡で起こっている原発事故は、明らかに老朽化による。原発に限らず大きな機械装置の事故率は「鍋底型曲線」といわれる経緯をたどる。即ち、建設当初は設計の見落としや施工ミスなどで事故は多発し、それらを手直ししながら次第に事故発生は減少して一定水準で何年か推移するが、耐用年数が近くなるとあちこちに綻びが生じ、再び事故発生率は増加する。これは人間の一生でも同じである。浜岡 1号は 1976年、2号は 78年に運転開始した。当初約 30年といわれた原発の寿命からすれば、今後老朽化に伴う事故はますます増加すると見なければならぬ。

大地震は、事故の引き金を引くだけでなく、規模を飛躍的に拡大させる。水素爆発と圧力容器の水漏れを起こした浜岡 1号は、未だに設計ミスの見落としが内在し、老朽化も進んでいることを証明した。水漏れの事前キャッチは不可能であることを中部電力は認めた。追い討ちをかけたのが 2号炉の配管の水漏れである。1号炉と同じ水素爆発の引き金になる配管を手直しし、住民の反対を押し切って運転を再開したとたんに、緊急炉心冷却装置の配管から水もれを起こした。中部電力の原発管理能力にも大きな欠陥があることが明らかになった。原発だけでなく、運転する組織にも老朽化に伴う過信と怠慢が忍び寄っているのではないか。

静岡県内で相次ぐ廃炉要求等の議会決議

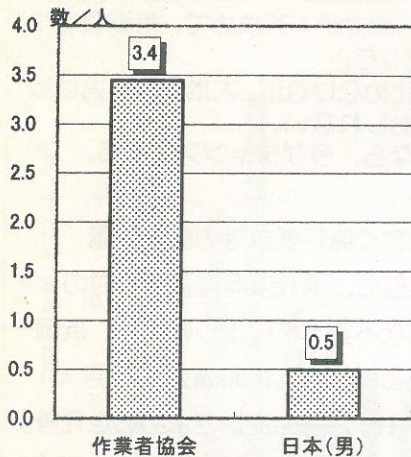
こうした事態に、地元浜岡周辺市町村の人々は、大きな不安を声に出し始めた。浜岡町の北東にある榛原郡吉田町議会が 6月 11日、「浜岡 1号と 2号の廃炉を求める意見書」を採択し、静岡県知事・文部科学大臣・経済産業大臣宛てに提出した。続いて 18日に榛原町議会が同主旨の意見書を採択、国と県に送った。事故原因の徹底究明と安全を求める意見書は、焼津市議会・小笠町議会・菊川町議会・三島市議会でも採択され、国や中部電力に提出されている。掛川市議会も廃炉を求める議会決議を行う予定である。こうした意見書の採択は、周辺市町村の人々が、これまでとは違い「浜岡原発の存在を自分達の問題と感じ始めている」ことを示している。また、5月 20日には、先のポレーシェでも紹介した、前スイス大使の村田光平氏や水野誠一前参議院議員・下河辺元国土庁事務次官ら 6名が、東海地震を前に浜岡原発の運転停止を求める声明を公表した。

こうした懸念に対する政府の対応は、全く不誠実である。最近、政府は事故が起こるたびに長引く点検や修理による稼働率低下を避けるため、通常の定期点検の簡略化を提案した。これではますます事故は増えるだろう。原発に対する小泉政治の対応は末期的である。

(河田)

事故処理作業者158人に聞きました アンケート結果報告（その1）

＜図-1. 現在治療中の疾患数＞



（比較対象として同年齢層の日本男子の数値を、「国民衛生の動向（2001年）」より引用した。）日本の場合は、一人平均0.5疾患であるのに対し、作業者協会のそれは実に7倍（3.5疾患/人）である。これは、入院中ではなく、現役の消防士を対象としたアンケートである。

疾患別で見ると、胃炎・胆のう炎・胃潰瘍・膵臓炎などの消化器系疾患が29%を占め、ついで高血圧・心不全・狭心症などの循環器系疾患が25%を占めている。（図-2参照）なぜ、消化器系・循環器系の疾患が多いのか（放射能の影響を受けやすい!?!）については、調査の必要がある。

また、作業者協会の18%を占める神経・筋疾患のほとんどは、ビタミンD欠乏症に由来する「骨軟化症」で、これは小児の場合「くる病」と呼ばれている疾患である。

日本では、海草を食べる習慣があり、ビタミンD不足による骨の異常はウクライナに比べて少ない。日本の神経・筋疾患は、カルシウムや運動不足による、関節炎や脊柱障害など骨密度に関連した疾患である。大陸内地にとって、海草類は高価である。

’02年2月に実施した栄養調査結果によると、「医療機関においても以前はヨード塩によりビタミンDを補充していたが、近年、ヨード塩の価格が上がったことや、すぐに湿気を帯びるため破棄してしまうなど無駄が多いので、必要性があっても購入をしなくなっている」とある。かねてからの食習慣により、幼児の頃からヨードを十分に摂取せず、現年齢が35～69歳となっていることを考慮すれば、やむを得ない結果である。

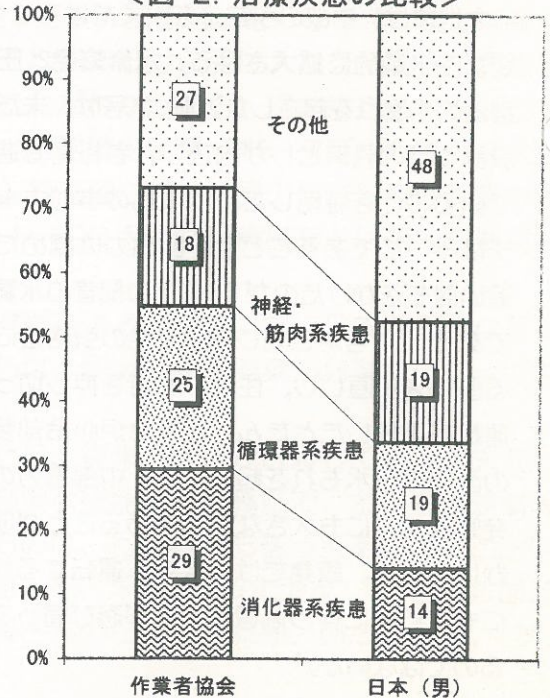
今回の結果報告は、アンケート内容のごく一部を解説したに過ぎない。

引き続き、入手したデータを分析して、順次、ポレーシェ誌上で報告していきたい。（美）

代表団が現地を訪問するたび、リキデーター（事故処理作業者）を対象として、「聞き取り調査」を行ってきた。さらに、統計的な調査が必要であると考え、アンケートをお願いしたところ、作業者協会（消防局）より158名、障害者協会より96名もの回答があり、ようやく今年6月にそれらの翻訳を完了した。今回は作業者協会分データの一部を抜粋して紹介する。

158名の事故当時の平均年齢は34.8歳、そのうち20～39歳の青年・壮年が108名を占めていた。〈図-1〉は、この158名が現在治療中の疾患数（一人当たりの平均疾患数）を示している。（比較対象として同年齢層の日本男子の数値を、「国民衛生の動向（2001年）」より引用

＜図-2. 治療疾患の比較＞



日本への旅

4月13日のウクライナ講座で、「ウクライナの民族と歴史」についてお話しをさせていただきましたペトリチェンコ・イリーナです。

1998年～1999年の1年間、名古屋大学へ留学しており、「救援・中部」の皆様方にとってもお世話になりました。ウクライナのために、一生懸命がんばっておられることに心から感謝いたします。今回の来日は、留学ではなくプライベートな旅行でした。日本に1回も来たことのない母に、私が1年過ごしたところを案内してあげました。そのため、名古屋が中心になりましたが、東京・奈良・京都はもちろん、有名な長野県の高遠の桜まで見ることができ、大変楽しい旅でした。

留学中にガイドのアルバイトをした、愛知県犬山市の博物館「明治村」にも、皆様のおかげで行ってまいりました。

留学を終えて帰国した頃と、今回の旅行は2年半も離れております。ウクライナ在住の友人に「その間、日本がだいぶ変わったぞ」と言われましたので、来日するまで不安で仕方ありませんでした。でも、思ったよりも変わっていないことを実感し安心しました。3年前と比べると、たとえば携帯のメールが普及し、東京の電車の中では、みんな黙ってメール入力に夢中なのは確かなのですが、根本的なところで、日本はあまり変わっていなかったと思います。

今回の旅行の一番の思い出は、「晴れた天気と心の温かい人に恵まれたこと」です。東京で1回も迷わずに済んだのも自慢できます。つらいことが思い出せないので、旅行はよかったと思います。母が日本を楽しんでいたのも嬉しかったです。



第4回・ウクライナ講座のお知らせ 「旅行者には見えないウクライナの街」と写真展

8月のウクライナ講座は、お盆休みと重なりますので、通常の第3土曜日ではなく、**日曜日（8月25日）**に行います。今回は京都在住のウクライナ人女性「オレーナ・シガル」さんをゲストにお招きしました。

オレーナさんはキエフ市と姉妹都市である京都市の国際センターで、国際交流員として働いていらっしゃいます。歴史のある観光都市というキエフと京都の共通点を比較しながら、「旅行者には見えないウクライナの街」について話していただきます。さらに「日本人の見たウクライナの街」写真展で、ウクライナのほかの街（オデッサ・リビウ）も紹介します。どうぞお気軽に、ウクライナの街を楽しんでください。お待ちしております。（京）

日時：8月25日（日）13:30～16:00

場所：名古屋市ボランティア情報センター（伏見ライフプラザ・12階）

TEL 052(222)5781

竹内さんのウクライナ便り

チェルノブイリ救援・中部
キエフ駐在 竹内高明



<キリチャンスキーさんから>

・「チェルノブイリの1グリヴナ」キャンペーン

消防局も協力して募金を集め始めた。この件で、キリ氏はラジオにも出演し、州のTV局がスポット広告(?)を流している(星美学園の子ども達の写真を使って)。ドンチェヴァ氏が研修を受けたアメリカの団体の人たちがジトミルに来たときは、キリ氏の話聞いて感激し、400グリヴナを寄付した。(しかし、アメリカ人ならもう少し多くくても悪くはなかったんじゃないか、とキリ氏はいつもの皮肉で付け加えてましたが…)

- ・7月15日月曜朝、移住基金事務所に入ると、ファックスが盗まれていた。(そばにあった電算機と一緒に。)他のものは残っていた。仕方なく以前のファックスを出してきて使っている。押し入れられぬよう鋼鉄製の扉に付け替えねばなるまい。おかげで余分な出費を強いられるが、背に腹はかえられない。

- ・8月から、キエフの公共交通料金が値上がりするそうです。(バス・路面電車は、50コペイカから75コペイカに。地下鉄は、50コペイカから1グリヴナに。)市内バスの37.7%を占める「イカルス」型のバスは、91.5%がすでに廃車期限を超えており、半数近くの路面電車は18年以上走っており、地下鉄の車両のうち154は廃棄しなければならない——というのが値上げの理由。

(『日々新聞』7月17日号)

- ・ここしばらく、ドル安・ユーロ高の傾向が続き、一時は1ドル=5.20グリヴナ、1ユーロ=5.25グリヴナ程度になりましたが、先週末あたりから逆転し、1ドル=5.22グリヴナ、1ユーロ=5.20グリヴナくらいになっています。
- ・アントニウク氏から、「4WD車の件で、チェルQにぜひ改めて感謝を伝えてほしい」と言われた。7月3日に森林火災が発生し、アントニウク氏も同車で出動したが、引き続いて別の森林火災も発生し、今日(18日)までジトミルに戻れなかった。かなりの面積の森林が燃えた。消防車が1台燃えてしまったが、人的被害はなかった。援助していただいた車が大いに役立った……とのこと。(この時期は森林が乾燥し、また森でキャンプをする人などの火の不始末から火災が多発する。)
- ・7月に入って、キエフは30度くらいの気温、快晴でさわやかな夏の天気です。名古屋はいかがでしょう？ 皆様お体を大切に楽しい夏でありますよう。

NGO訪問記

東員第二中学校2年A組 水本亜依

こんにちは。5月31日に訪問させていただいた際には、いろいろお世話になり、ありがとうございました。

見学の前から、それなりにチェルノブイリの事故のことは知っていましたが、見学してみて、まだ知らないことが多かったのがよくわかりました。まず、今なお放射能によって苦しんでいる人がいること、食べ物の汚染もひどいこと、医療器具などが不足していることなど、たくさんを知ることができました。

また、一番心に残ったものは、現地の人々の書いた絵でした。どれもみんな哀しげで、「チェルノブイリの人々には、今も心の傷が残っている」ことが、何よりも伝わってきました。やはり、この絵をたくさんに人々に見てもらい、感じてもらうことは、とても重要なことだと思います。

最後になりましたが、これからもこの活動を続けていってほしいと思います。頑張ってください。



＜東員第二中学校2年A組の皆さん＞

事務局よりお礼のひとつ

ボランティアは、自分の考えや望んでいることを実践したり、社会に還元したり、また恵まれない人や病気の人、体の不自由な人を援助したりしますが、それだけではなく、活動によって自分たち自身が新しい世界に触れ、さまざまな人々と出会って、自らの成長の糧にもなるものです。これからも、皆さんが大人になる過程でさまざまな経験をつみ、素敵な大人になることを期待しています。

蒸し暑い季節ですが、お体に気をつけて、良く遊び良く学んでください。

リニューアルしました

このたび、長年親しんでいただいたチェルQオリジナル・ステッカーがついに底を尽き、リニューアルすることになりました。

予算が減少する中で、こういった緊急の費用が捻出しにくく、リニューアルをためらったその時！ 知多市在住の榎本さんから、寄付の申し出があり、一件落着となりました。このステッカーは引き続き「救援・中部」が贈った医療機器等に証（マーキング）として貼られることとなります。（美）



事務局だより

先日、名古屋NGOセンターからありがたい情報が入りました。「中部地域のNGOでのインターンシップ」という企画についての情報です。地域のNGOで、将来NGOで働きたいという青年達の研修を受け入れてほしい、というものでした。スタッフの平均年齢が高いチェル救にとっては、願ってもない朗報です。若い世代・若い感性の参加は、活動に新鮮な風を吹き込み、思ってもみない発想との出会いになるかも知れません。早速、チェル救恒例の「合宿」で、彼らに取り組んでほしい企画について話し合いました。因みに彼らは、高い参加費をNGOセンターに払っての参加。「本気」でNGOの活動をしようという熱意のある青年達に違いありません。期待一杯。…でも、ひとつ心配なことが…。事務所は今でさえ3人の大人と3台のパソコン、デスク、テーブルとひしめき合っています。彼らの働くスペースを作らなければなりません。1人ならなんとかなりますが、2人だったらどうしよう…。彼らが最初に学ぶことは、事務所賃貸料など、活動を維持するための経費（運営費関連）に、お金をあまり使えない日本のNGOの現状を知ることかも知れません。（山盛）

編集後記

- ☆ひさし振りの試験に、暑さを忘れて青くなってる?! レポートのいくつかはウクライナねた。ウクライナ様さま、ありがとう！さわやかな充実感。（京）
- ☆ジトミルで人肉喰い事件が起きたと、新聞に載っていた。犯行はあの美しい森の中。ウクライナは豚肉も鶏肉もあんなにおいしいのに、なぜ人の肉なんか！（佳）
- ☆辛いことは半分ずつ、楽しいことは2倍に…お互いに分けあう。でも事故処理作業者の体験を分け合うのは辛すぎる…せめて理解する努力は惜しまずに。（美）
- ☆毎号、発行直前の編集委員会は、ついつい24時を回ってしまう。「濃い内容を、いかに読みやすくするか？」と四苦八苦するわけだが、それよりも、硬派「ポレーシェ」につきあってくくださる読者の方が、実は大変なんだよね。いつも読んでくれて、ありがとう。（J）

エープリントさんからコメントをいただきました

ともすれば忘れてしまう「チェルノブイリ」だけれど、印刷を担当させていただいているおかげで、定期的に原発の恐ろしさを思い出させてもらっている。（本当は思い出したくも無いんじゃない！）チェル救の皆さんの具体的な活動に敬意を持ちながら、「救援」という文字が載っていない『ポレーシェ』を刷り終わって、冷たい氷水でホッと一息ついている姿を、暑さでボンヤリした頭で夢見ています。

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町20-14

印刷「エープリント」

TEL・FAX (052) 871-9473